篇文学全集 21

武郎
麟三
周作

責任編集 臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集　第21巻

昭和43年9月15日第一刷発行

著者　有島武郎
　　椎名麟三
　　遠藤周作

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
郵便番号　101—91
電話　東京(291)7651
振替　東京4123
製版・明和印刷
印刷・多田印刷
製本・鈴木製本

定価　360円

目次

有島武郎
カインの末裔……三
An Incident……四七
小さき者へ……五六
骨……七〇
酒狂……九一

椎名麟三
寒暖計……一〇九
神の道化師……一二九

半端者の反抗……一七六

遠藤周作

札の辻……二〇五

私のもの……二二一

四十歳の男……二三八

鑑賞（瀬沼茂樹）……二六一

装幀　栃折久美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

有
島
武
郎

有島武郎（一八七八―一九二三）

明治十一年三月四日東京小石川水道町に生れた。弟に生馬、英夫（里見弴）がある。学習院から札幌農学校に入った。内村鑑三を愛読、札幌独立教会に入った。明治三十四年札幌農学校を卒業、三十六年アメリカへ留学、欧州を廻って四十年帰国した。四十三年「白樺」創刊に際し同人となった。大正六年まで東北大農科大学教授を勤めた。「かんかん虫」「或る女のグリンプス」「An Incident」「カインの末裔」「小さき者へ」などの名作を大正七年までに続々発表して文壇の流行児となった。「或る女」「惜しみなく愛は奪う」をまとめた頃、社会運動の波が高まり内的生活の矛盾に悩み「宣言一つ」を書き親ゆずりの農場を放棄したりした。「ども又の死」「骨」「酒狂」などを書いたが苦悩は去らず、十二年六月九日軽井沢の別荘で波多野秋子とともに自殺した。評論・童話等も多い。

カインの末裔

一

長い影を地にひいて、痩馬の手綱を取りながら、彼は黙りこくって歩いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のように頭ばかり大きい赤坊をおぶった彼の妻は、少し跛脚をひきながら三四間も離れてその跡からとぼ〳〵とついて行った。

北海道の冬は空まで逼っていた。蝦夷富士と云われるマッカリヌプリの麓に続く胆振の大草原を、日本海から内浦湾に吹きぬける西風が、打寄せる紆濤のように跡から跡から吹き払って行った。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になったマッカリヌプリは少し頭を前にこゞめて風に刃向いながら黙ったまゝ突っ立って居た。昆布嶽の斜面に小さく集まった雲の塊を眼がけて日は沈みかゝっていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかった。心細い程真直な一筋道を、彼と彼の妻だけが、よろ〳〵と歩く二本の立木のように動いて行った。

二人は言葉を忘れた人のようにいつまでも黙って歩いた。馬が溺りをする時だけ彼は不承不承に立ちどまった。妻はその暇にようやく追いついて背の荷をゆすり上げながら溜息をついた。馬が溺りをすますと二人は又黙って歩き出した。

「こゝらおやじ（熊の事）が出るずら」

四里にわたるこの草原の上で、たった一度妻はこれ丈けの事を云った。慣れたものには時刻と云い、所柄と云い、熊の襲来を恐れる理由があった。彼はいま〳〵しそうに草の中に唾を吐き捨てた。

草原の中の道がだん〳〵太くなって国道に続く所まで来た頃には日は暮れてしまっていた。物の輪郭

が円味を帯びずに、堅いまゝで黒ずんで行くこちんとした寒い晩秋の夜が来た。

着物は薄かった。そして二人は餓え切っていた。妻は気にして時々赤坊を見た。生きているのか死んでいるのか、とにかく赤坊はいびきも立てないで首を右の肩にがくりと垂れたまゝ黙っていた。

国道の上にはさすがに人影が一人二人動いていた。たいていは市街地に出て一杯飲んでいたのらしく、行違いにしたゝか酒の香を送ってよこすものもあった。彼は酒の香をかぐと急にえぐられるような渇きと食慾とを覚えて、すれ違った男を見送ったりしたが、いまくしさに吐き捨てようとする唾はもう出て来なかった。糊のように粘ったものが唇の合せ目をとじ附けていた。

内地ならば庚申塚か石地蔵でもある筈の所に、真黒になった一丈もありそうな標示杭が斜になって立っていた。そこまで来ると干魚をやく香いがかすかに彼の鼻をうったと思った。彼ははじめて立ち停った。痩馬も歩いた姿勢をそのままにのそりと動かなくなった。鬣と尻尾だけが風に従ってなびいた。

「何んて云うだ農場は」

脊丈の図抜けて高い彼は妻を見おろすようにして、こうつぶやいた。

「松川農場たら云うだが」

「たら云うだ？　白痴」

彼は妻と言葉を交わしたのが癪にさわった。そして馬の鼻をぐんと手綱でしごいて又歩き出した。暗くなった谷を距てて少しこっちよりも高い位の平地に、忘れたように間をおいてともされた市街地のかすかな灯影は、人気のない所よりも却って自然を淋しく見せた。彼はその灯を見るともう一種のおびえを覚えた。人の気配をかぎつけると彼は何んとか身づくろいをしないではいられなかった。自然さがその瞬間に失われた。それを意識する事が彼をいやが

上にも仏頂面にした。「敵が眼の前に来たぞ。馬鹿な面をしていやがって、尻子玉でもひっこぬかれるな」とでも云いそうな顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帯をしめ直した。良人の顔附には気も着かない程眼を落した妻は口をだらりと開けたまゝ一切無頓着でたゞ馬の後について歩いた。

K市街地の町端れには空屋が四軒までならんで居た。小さな窓は髑髏のそれのような真暗な眼を往来に向けて開いていた。五軒目には人が住んでいたがうごめく人影の間に囲爐裡の根粗朶がちょろ〳〵と燃えるのが見えるだけだった。六軒目には蹄鉄屋があった。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中にまじって火花が飛び散っていた。店は熔炉の火口を開いたように明るくて、馬鹿々々しくだゞっ広い北海道の七間道路が向側まではっきりと照らされていた。片側町ではあるけれども、とにかく家並みがあるだけに、強いて方向を変えさせられた風の脚が意趣に砂を捲き上げた。砂は蹄鉄屋の前の火の光りに照りかえされて濛々と渦巻く姿を見せた。仕事場の鞴の囲りには三人の男が働いていた。鉄砧にあたる鉄槌の音が高く響くと疲れ果てた彼の馬さえが耳を立てなおした。彼はこの店先きに自分の馬を引っ張って来る時の事を思った。妻は吸い取られるように暖かそうな火の色に見惚れていた。二人は妙にわく〳〵した心持になった。

蹄鉄屋の先きは急に闇が濃くなって、たいていの家はもう戸じまりをしていた。荒物屋を兼ねた居酒屋らしい一軒から食物の香と男女のふざけ返った濁声がもれる外には、真直な家並みは廃村のように寒さの前にちゞこまって、電信柱だけが、けうとい唸りを立てていた。彼と馬と妻とは前の通りに押し黙って歩いた。歩いては時折り思い出したように立ち停った。立ち停っては又無意味らしく歩き出した。

四五町歩いたと思うと彼等はもう町はずれに来て

しまって居た。道がへし折られたように曲って、その先きは、真闇な窪地に、急な勾配を取って下っていた。彼等はその突角まで行って、又立ち停った。遙か下の方からは、うざ〳〵する程繁り合った濶葉樹林に風の這入る音の外に、シリベシ川のかすかな水の音だけが聞こえていた。

「聞いて見ずに」

妻は寒さに身をふるわしながらこうぅめいた。

「汝聞いて見べし」

いきなりそこにしゃごんでしまった彼の声は地の中からでも出て来たようだった。妻は荷をゆりあげて鼻をすゝり〳〵取って返した。一軒の家の戸を敲いて、ようやく松川農場のありかを教えてもらった時は、彼の姿を見分けかねる程遠くに来ていた。大きな声を出す事が何んとなく恐ろしかった。恐ろしいばかりではない、声を出す力さえなかった。そして跛脚をひき〳〵又返って来た。

彼等は眠くなる程疲れ果てながら又二三町程歩かねばならなかった。そこに下見囲、板葺の真四角な二階建が外の家並みを圧して立っていた。

妻が黙ったまゝ立ち留ったので、彼はそれが松川農場の事務所である事を知った。ほんとうを云うと彼は始めからこの建物がそれにちがいないと思っていたが、這入るのがいやなばかりに知らんふりをして通りぬけてしまったのだ。もう進退谷まった。彼は道の向側の立樹の幹に馬を繋いで、燕麦と雑草とを切りこんだ亜麻袋を鞍輪からほどいて馬の口にあてがった。ぽりり〻ぽりり〻と云う歯ぎれのいゝ音がすぐ聞こえ出した。彼と妻とは又道を横切って、事務所の入口の所まで来た。そこで二人は不安らしく顔を見合わせた。妻がぎごちなそうに手を挙げて髪をいじっている間に彼は思い切って半分ガラスになっている引戸を開けた。滑車がけたゝましい音をたてて鉄の溝を滑った。がたぴしする戸ばかりをあつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

かい慣れている彼の手の力があまったのだ。妻がぎょっとするはずみに背の赤坊も眼を覚まして泣き出した。帳場に居た二人の男は飛び上らんばかりに驚いてこちらを見た。そこには彼と妻とが泣く赤坊の始末もせずにのそりと突っ立っていた。

「何んだ手前達は、戸を開けっぱなしにしくさって風が吹き込むでねえか。這入るのなら早く這入って来う」

紺のあつしをセルの前垂れで合せて、樫の角火鉢の横座に坐った男が眉をしかめながらこう怒鳴った。人間の顔――殊にどこか自分より上手な人間の顔を見ると彼の心はすぐ不貞腐れるのだった。刃に刃向う獣のように捨鉢になって彼はのさくと図抜けて大きな五体を土間に運んで行った。妻はおずくと戸を閉めて戸外に立っていた、赤坊のなくのも忘れ果てるほどに気を顚倒させて。

声をかけたのは三十前後の、眼の鋭い、口髭の不似合な、長顔の男だった。農民の間で長顔の男を見るのは、豚の中で馬の顔を見るようなものだった。彼の心は緊張しながらもその男の顔を珍らしげに見入らない訳には行かなかった。彼は辞儀一つしなかった。

赤坊が縊り殺されそうに戸の外で泣き立てた。彼はそれにも気を取られていた。

上り框に腰をかけていたもう一人の男はやゝ暫く彼の顔を見つめていたが、浪花節語りのような妙に張りのある声で突然口を切った。

「お主は川森さんの縁のものじゃないんかの。どうやら顔が似とるじゃが」

今度は彼の返事も待たずに長顔の男の方を向いて、

「帳場さんにも川森から話いた筈じゃがの。主がの血筋を岩田が後に入れて貰いたい云うてな」

又彼の方を向いて、

「そうじゃろがの」

それに違いなかった。然し彼はその男を見ると虫酸が走った。それも百姓に珍らしい長い顔の男で、禿げ上った額から左の半面にかけて火傷の跡がてらてらと光り、下瞼が赤くべっかんこをしていた。而して唇が紙のように薄かった。

帳場と呼ばれた男はその事なら呑み込めたと云う風に、時々上眼で睨み〳〵、色々な事を彼に聞き糺した。而して帳場机の中から、美濃紙に細々と活字を刷った書類を出して、それに広岡仁右衛門と云う彼の名と生れ故郷とを記入して、よく読んでから判を押せと云って二通つき出した。仁右衛門（是れから彼と云う代りに仁右衛門と呼ぼう）は固より明盲だったが、農場でも漁場でも鉱山でも飯を食う為めにはそう云う紙の端に盲判を押さなければならないという事は心得ていた。彼は腹がけの丼の中を探り廻してぼろ〳〵の紙の塊をつかみ出した。そして筍の皮を剝ぐように幾枚もの紙を剝がすと、真黒になった三文判がころがり出た。彼はそれに気息を吹きかけて証書に孔のあく程押しつけた。而して渡された一枚を判と一緒に丼の底にしまってしまった。是れだけの事で飯の種にありつけるのはありがたい事だった。戸外では赤坊がまだ泣きやんでいなかった。

「俺ら銭こ一文も持たねえからちょっぴり借りたいだが」

赤坊の事を思うと、急に小銭がほしくなって、彼がこう云い出すと、帳場は惘れたように彼の顔を見詰めた、――こいつは馬鹿な面をしている癖に油断のならない横紙破りだと思いながら。而して事務所では金の借貸は一切しないから縁者になる川森からでも借りるがいゝし、今夜は何しろそこに行って泊めて貰えと注意した。仁右衛門はもう向腹を立ててしまっていた。黙りこくって出て行こうとすると、そこに居合せた男が一緒に行ってやるから待てととめた。そう云われて見ると彼は自分の小屋がどこに

あるのかを知らなかった。

「それじゃ帳場さん何分宜しう頼むがに、塩梅よう親方の方にも云うてな。広岡さん、それじゃ行くべえかの。何んとまあ孩児の痛ましくさかぶぞい。じゃまあおやすみ」

彼は器用に小腰をかゞめて古い手提鞄と帽子とを取り上げた。裾をからげて砲兵の古靴をはいている様子は小作人と云うよりも雑穀屋の鞘取りだった。

戸を開けて外に出ると事務所のボン〳〵時計が六時を打った。ぴゅう〳〵と風は吹き募っていた。赤坊の泣くのに困じ果てて妻はぽつりと寂しそうに玉蜀黍殻の雪囲ひの影に立っていた。

足場が悪いから気を附けろと云いながら彼の男は先きに立って国道から畦道に這入って行った。大濤のようなうねりを見せた収穫後の畑地は、広く遠く荒涼として拡がっていた。眼を遮るものは葉を落した防風林の細長い木立だけだった。ぎら〳〵と瞬く無数の星は空の地を殊更ら寒く暗いものにしていた。仁右衛門を案内した男は笠井と云う小作人で、天理教の世話人もしているのだと云って聞かせたりした。

七町も八町も歩いたと思うのに赤坊はまだ泣きやまなかった。縊り殺されそうな泣き声が反響もなく風に吹きちぎられて遠く流れて行った。

やがて畦道が二つになる所で笠井は立ち停った。

「この道をな、こう行くと左手にさえて小屋が見えようがの。な」

仁右衛門は黒い地平線をすかして見ながら、耳に手を置き添えて笠井の言葉を聞き漏らすまいとした。それほど寒い風は激しい音で募っていた。笠井はくどくどとそこに行き着く注意を繰り返して、仕舞に金が要るなら川森の保証で少し位は融通すると附け加えるのを忘れなかった。然し仁右衛門は小屋の所在が知れると後は聞いていなかった。餓えと寒さが

ひし〳〵と応え出してがた〳〵身をふるわしながら、挨拶一つせずにさっさと別れて歩き出した。

玉蜀黍殻といたどりの茎で囲いをした二間半四方程の小屋が、前のめりにかしいで、海月のような低い勾配の小山の半腹に立っていた。物の饐えた香と堆肥の香が恣にたゞよっていた。小屋の中にはどんな野獣が潜んでいるかも知れないような気味悪さがあった。赤坊の泣き続ける暗闇の中で仁右衛門が馬の背からどすんと重いものを地面に卸す音がした。痩馬は荷が軽くなると、欝積した怒りを一時にぶちまけるように嘶いた。遙かの遠くでそれに応えた馬があった。後は風だけが吹きすさんだ。

夫婦はかじかんだ手で荷物を提げながら小屋に這入った。長く火の気は絶えていても、吹きさらしから這入るとさすがに気持よく暖かった。二人は真暗な中を手さぐりで有り合せの古蓆や藁をよせ集めて、どっかと腰を据えた。妻は大きな溜息をして背の荷と一緒に赤坊を卸して胸に抱き取った。乳房をあてがって見たが乳は涸れて居た。赤坊は堅くなりかゝった歯齦でいやと云うほどそれを嚙んだ。而して泣き募った。

「腐孩子！　乳首食いちぎるに」

妻は慳貪にこう云って、懐から塩煎餅を三枚出して、ぽり〳〵と嚙みくだいては赤坊の口にあてがった。

「俺らがにも越せ」

いきなり仁右衛門が猿臂を延ばして残りを奪い取ろうとした。二人は黙ったまゝで本気に争った。食べるものと云っては三枚の煎餅しかないのだから。

「白痴」

吐き出すように夫がこう云った時勝負はきまっていた。妻は争い負けて大部分を掠奪されてしまった。二人は又押し黙って闇の中で足しない食物を貪り喰った。然しそれは結局食慾をそゝる媒介になる計り

だった。二人は喰い終ってから幾度も固唾を飲んだが、火種のない所では南瓜を煮る事も出来なかった。赤坊は泣きづかれに疲れてほっぽり出されたまゝいつの間にか寝入っていた。

居鎮まって見ると隙間もる風は刃のように鋭く切り込んで来ていた。二人は申し合せたように両方から近づいて、赤坊を間に入れて、抱き寝をしながら藁の中でがつ〳〵と震えていた。然しやがて疲労は凡てを征服した。死のような眠りが三人を襲った。

遠慮会釈もなく迅風は山と野とをこめて吹きすさんだ。漆のような闇が大河の如く東へ東へと流れた。マッカリヌプリの絶巓の雪だけが燐光を放ってかすかに光っていた。荒くれた大きな自然だけがそこに甦った。

こうして仁右衛門夫婦は、どこからともなくK村に現れ出て、松川農場の小作人になった。

二

仁右衛門の小屋から一町程離れて、K村から倶知安に通う道路沿いに、佐藤与十と云う小作人の小屋があった。与十と云う男は小柄で顔色も青く、何年たっても齢をとらないで、働きも甲斐なさそうに見えたが、子供の多い事だけは農場一だった。あすこの嚊は子種をよそから貰ってでもいるんだろうと農場の若い者などが寄ると戯談を言い合った。女房というのは体のがっしりした酒喰いの女だった。大人数なために稼いでも〳〵貧乏しているので、だらしのない汚い風はしていたが、その顔付は割合に整っていて不思議に男に逼る淫蕩な色を湛えていた。

仁右衛門がこの農場に這入った翌朝早く、与十の妻は袷一枚にぼろ〳〵の袖無を着て、井戸――と云っても味噌樽を埋めたのに赤鏽の浮いた上層水が四分目ほど溜ってる――の所でアネチョコと云い慣わ

された舶来の雑草の根に出来る薯を洗っていると、そこに一人の男がのそりとやって来た。六尺近い脊丈を少し前こゞみにして、栄養の悪い土気色の顔が真直に肩の上に乗っていた。当惑した野獣のようで、同時にどこか奸譎い大きな眼が太い眉の下でぎろぎろと光っていた。それが仁右衛門だった。彼は与十の妻を見るとちょっとほゝえましい気分になって、

「おっかあ、火種べあったらちょっぴり分けて呉れずに」

と云った。与十の妻は犬に出遇った猫のような敵意と落着きを以て彼を見た。而して見つめたまゝで黙っていた。

仁右衛門は脂のたまった大きな眼を手の甲で子供らしくこすりながら、

「俺らあすこの小屋さ来たもんだのし。乞食では無えだよ」

と云ってにこ〳〵した。罪のない顔になった。与十の妻は黙って小屋に引きかえしたが、真暗な小屋の中に寝乱れた子供を乗りこえ〳〵囲炉裡の所に行って粗朶を一本提げて出て来た。仁右衛門は受取ると、口をふくらましてそれを吹いた。而して何か一言二言話しあって小屋の方に帰って行った。

この日も昨夜の風は吹き落ちていなかった。空は隅から隅まで底気味悪く晴れ渡っていた。そのために風は地面にばかり吹いているように見えた。佐藤の畑はとにかく秋耕をすましていたのに、それに隣った仁右衛門の畑は見渡す限りかまどがえしとみずひきとあかざととびつかとで茫々としていた。ひき残された大豆の殻が風に吹かれて剽軽な音を立てていた。あちこちにひょろ〳〵と立った白樺はおおかた葉をふるい落してなよ〳〵とした白い幹が風にたわみながら光っていた。小屋の前の亜麻をこいだ所だけは、こぼれ種から生えた細い茎が青い色を見せていた。後は小屋も畑も霜の為めに白茶けた鈍い狐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong